

先週の講壇から

「悲しみの果てに」

ルカによる福音書 第22章 第39節～46節

聖句「イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。」(22:45)

1. 《笑顔の裏側》 大阪に「夜間保育」専門の保育園があります。利用者の殆どは十三（歓楽街）で働く水商売です。夕方に子どもを預けた親御さんが、午前2～3時に、眠っている子を抱えて帰って行きます。ある夜、就寝時間中に目覚めた子が職員室に乱入して来ました。普段は元気なやんちゃ坊主ですが、先生が叱ると「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣き疲れて眠ってしまいました。辛いのは大人だけではありません。子どもだって辛さを抱えて生きているのです。
 2. 《悲しみの山》 一般には「ゲツセマネの祈り」として知られますが、「ルカ」は「オリーブ山」と言います。オリーブ山の中腹に「ゲツセマネ／油絞り」と呼ばれるオリーブ園があったのです。弟子のマルコの母親が所有する土地だったようです。ダビデ王が息子アブサロムに背かれて都落ちした時に、泣きながら山越えをした「涙の山」なのです。弟子たちも「悲しみの果てに」眠っています。イエスさまもオリーブ山を下りながら、百年後の「第二次ユダヤ戦争」の結果、ローマ帝国によって滅ぼされる都エルサレムの運命を思って、涙を流して居られます。このようにオリーブ山には多くの涙が流されたのです。
- 《辛さの連帯》 この祈りの場面では、イエスさまの心も大きく揺れ動いています。通常の場合、ユダヤ教徒は立ったまま、両手を天に向けて、大声で祈りますが、主は跪いて呻くようにして祈っています。動揺し、神に助けを求めながらも、遂には「わたしの願いではなく、御心のままに」と「愛の決断」をされるのです。それは、多くの人の悲しみに連帯するための決意だったのです。イエスさまは苦しみ悩む人に連帯される、罪人に連帯される、陰府にも地獄にも付き合っ下さる。それがキリストの十字架なのです。イエスさまは弟子たちに「誘惑に陥らぬよう」注意されます。「眠るな」という意味ではありません。「悲しみの孤独と疎外」から「悲しみの連帯」へと、私たちを招いて居られるのです。

朝日研一朗牧師